

人生ハンド仏句

第73号
H. 20. 4. 1
(毎月1日発行)

編集・発行

玉蓮山 真成寺

編集部 谷川久仁子

TEL・FAX (0765)22-2268

メールアドレス

kokorochanthk@ybb.ne.jp

ホームページアドレス

<http://www.geocities.jp/sinjyoujitoyama108/>

仏様の目と 私たちの目

住職 谷川寛俊

「私たちの目、み仏の目、何がつう違うのか？今という時間の捉え方に違いがある」という経文が「眼根清浄」という経文であるが、確かに私たちの目とみ仏の目はどこも違ってない。ただ胸の中にある心、見つめる目の心の在り方によって出てくる視野が千差万別なのであります。

通称、やさしい目、怒った目、愛情のこもった目等々、目は心の窓といわれるように、外見の目は、私の目も仏さまの目も変わりないが、目の中にこもった心の在り方は、百人百様の姿を作り出すものです。病を一つ取り上げて、善き方便として自らの反省とするか、または他人のせいにするか、大聖人様は「病によりて道心は起り候」として、信心が病を縁とし、

発心して心の大転換を起こす事があるといわれている。

仏教では「一水四見」といって水を例に挙げて、人は水を水と見るが、魚は住処と見、餓鬼は炎と見、天人は甘露と見て、物の見方の大切なことを教えています。ただの水でさえ、見る立場によって全く違う見方をするとすることは「捉え方」、即ち心の在り方によるのではないのでしょうか？「今という時間」は単なる今でもあるが、その今は次なる今、また将来の今でもあるわけです。

「生きている限り若くはならない。けれども生きていくことは素晴らしいことですよ」とは、先に亡くなった黒澤明監督の言葉ですが、人生の素晴らしさに自信をなくして、自ら命を絶つ人が毎年三万人を越えるということは大変悲しいことであるが、仏さまの目から見れば「今」という時間の捉え方が大きく間違っていたということになります。「心清ければ土もまた清し」とは大聖人様のお言葉であるが、俗に言う目の付け所によって人生は千種万態になることが分かります。

ある新聞の投書欄に、ある高校二年生の一人息子が脳腫瘍で倒れ、そして病室で次のような文書を遺して亡くなっていた。

「僕は病気になったお陰で、色々な本を読む事ができました。中でも天文学や哲学など興味ある本に出会ったことは本当に有り難いことでした。やがて僕はあの大きな大空を自由に飛び回り、宇宙を遊び回っていることでしょう。そして今まで育ててくれたお父さん、お母さん、有り難う」という内容でした。葬儀の日、はからずもその文章を読んだ母親は「お前は違いねえ…立派だよ」と、心の中でつぶやいて、悲しみの涙の中に感激の涙を流したという。亡くなったこの高校生は、文字通り病を越え、死を越えて深い悟りの世界へ入ったのではないかと思えます。悲しみに沈む両親の心を、我が子の清らかな心に、感情が動かされて、感激の涙を流したように、人の感情は尊くあり、貴重なものであります。この様な心境になれるのも、疑いのない素直な信仰心から生まれるのかもしれません。

仏心とは懐に暖める卵のようなもの
ひながかえるかどうかは 自分次第